

## グイ語の語順と Wh 疑問文

大野 仁美

キーワード： グイ語、語順、情報構造

### 要旨

グイ語（コエ語族・カラハリコエ）の語順は、自由度が高いことが知られる一方で、同一の構成要素の配列順が異なることによって成立するそれぞれの文が語用論的に同じ効果をもつのかという問題については、研究の対象にはされてこなかった。本稿では、グイ語の Wh 疑問文に対する解答において、動詞の生起位置に制限がみられるという新しい事実の発見から、グイ語の語順の決定に情報構造的な動機がある可能性を指摘する。

### 1. はじめに

グイ語はコエ語族・西カラハリグループに属する言語である（Güldemann & Vossen 2000, Güldemann 2014）。グイ語の語順については、これまでその自由さが観察されてきており、主節内における構成要素順は、TAM が主語の左側に生起できないという制限以外は自由であることが指摘されている（Nakagawa 2013）。一方で、同じ構成要素からなる配列の異なる文の語用論的な相違については見過ごされて来た。本稿では、グイ語の語順に語用論的な制限が見られることを報告し、語順がグイ語の情報構造に関わっていると考えられることを示す。以下、まず、グイ語の語順の自由さを支えている文法的な背景（主要項が動詞との文法関係に関わる情報を担うこと）と語用論的な背景（固定された焦点位置がないこと）について他のコエ語との対照を通して確認する（2 節）。次に、Wh 疑問文の語順が自由であることを見た後で、それにも関わらず Wh 疑問文に対する解答の語順には制限があることを見る（3 節）。最後に、今後の展望について述べる（4 節）。

### 2. コエ語における語順：PGN 辞と項マーカー

コエ語族に属するそれぞれの言語に共有される文法項目に、PGN 辞（person/gender/number の頭文字を使った略名）の存在がある。人称・性・数の区別を有する一連の形態素群<sup>1</sup>で、クリティックとして名詞句に付加し、その名詞句の主要部

<sup>1</sup> 代名詞として用いられる PGN 辞については、ここでは触れない。

である名詞の（人称・）性・数を示す働きをする。名詞句内では、主要部とその従属部との間の（人称・）性・数の一致を示す。以下グイ語を例に挙げると、「鍋」という名詞は女性名詞で、それを「新しい」という形容詞で修飾する場合、形容詞に「女性」の PGN 辞が付加される。鍋が単数の場合は、形容詞に付加する PGN 辞も単数のものになる<sup>2</sup>。

- (1)      *qábā=sì*                      *l'óē*  
           新しい=女.単      鍋              「新しい鍋」

動詞の項である名詞句をホストとして PGN 辞が付加する場合、グイ語では、当該の名詞句が動詞とのあいだに持つ文法関係も示す。つまり、グイ語では PGN 辞は、人称・性・数だけでなく、格情報も担う。グイ語の例(2)では、「女性」が主語であることと「鍋」が目的語であることは、それぞれに付加した PGN 辞によって示されている。名詞句が女性・単数で、主語である場合の PGN 辞は *sì*、目的語である場合は *sà* である。

- (2)      *lgāē-kò=sì*              *c'ū*                      *l'óē=sà*              *l?āĩ.*  
           女性=女.単.主格 昨日過去              鍋=女.単.目的格 買う  
           「女性が昨日鍋を買った」

このように、グイ語においては PGN 辞に「主格」を示す系列と「目的格」を示す系列が別途存在しているので、主語と目的語との区別は PGN 辞単独によってなすことが可能である。

コエ語族に属する他の言語では、文法関係を示すには項マーカ (*ʔa/a*)<sup>3</sup> が用いられる。クエ語は、クリティックとして用いる PGN 辞には一系列しか存在せず、主要項である主語にも目的語にも同じ項マーカを用いる。ナマ語やツィハ語は、この項マーカを取り込んだ系列と、そうでない系列を有する。グイ語はさらに、主語を示す系列を分化させている。コエ語族内でのバリエーションをグイ語と対照的に表すために上記3言語（ナマ語・クエ語・ツィハ語）を用い、表1にこれらとグイ語の4言語が目的語を示す手段を、それぞれの系統とともに示す。

<sup>2</sup> コエ語においては、名詞の性は「男性／女性／共性（＝男性＋女性）の区別が、数は「単数／双数／複数」の区別がある。それぞれ略して、男・女・共；単・双・複と示す。

<sup>3</sup> 主語にも目的語にも付加するので、「項マーカ」と呼ぶことにする。

表 1. コエ語における主語と目的語の区別

言語名	分類		目的語の示し方	出典
ナマ Nama	コエコエ		項マーカースを取り込んだ PGN 辞	Haacke 2006 Hagman 1977
クエ Khwe	非コエコエ	東カラハリ	PGN 辞にさらに項マーカースを付加	Kilian-Hatz 2008, 2013
ツィハ Ts'ixa			項マーカースを取り込んだ PGN 辞	Fehn 2014
グイ G ui		西カラハリ	項マーカースを取り込んだ PGN 辞	Nakagawa 2013

項マーカース (*?a/a*)は、さらに、冗長的に目的語をマークしたり (ツィハ語)、通常と異なる位置にある主語をマークしたり (ナマ語) することが報告されている<sup>4</sup>。グイ語では、この項マーカースが目的語をマークすることはあるが、主語を示すのに用いられることはない。目的語をマークする方法は2種あり、1つは PGN 辞を用いず裸の名詞句に項マーカースだけを用いるもので、老年層に偏った古い手法なのではないかと考えられる。もう1つは目的格の PGN 辞にさらに追加して用いられるもので、項の外置などに伴って出現する。そのうち主節内の語順がトリガーになって出現すると思われる例については3節で見る。

これらの、項マーカースがこの4言語において主要項をマークするかどうかの情報をまとめると表2のようになる(「+」はマークすることを、「--」はしないことを、「(+)」はマークするが頻度が低い・一般的ではないことを示す)。項マーカース (*?a/a*) の「項をマークする」機能は、他のコエ語族の言語と比べてグイ語では低いことがわかる。

これは、グイ語でそれだけ PGN 辞がより *case-sensitive* になっているからだと考えられそうである。しかし、グイ語に近いガナ語では、グイ語より PGN 辞が *elaborate* されさらに *case-sensitivity* が高くなっているにも関わらず、冗長的な項マーカース使用が観察されるという事実から、この見込みは否定される。

<sup>4</sup> さらに、*copula/identifier* としても用いられる。グイ語では、こちらの役割の方が主要であるが、本稿では扱わない。

表 2. 項マーカ- $(\text{?a/a})$ の機能：項の表示

	PGN 辞による主/目の区別	主語表示	目的語表示
クエ語	なし	+	+
ナマ語	あり	(+)	+
ツィハ語	あり	--	+
グイ語	あり	--	(+)

項マーカ- $(\text{?a/a})$ は、情報構造とも関わることもあり、クエ語とツィハ語においては、焦点マーカ-としても用いられる。ツィハ語では、固定された焦点の位置は確認されていないが、Wh 疑問詞（本来的に焦点化された要素であると考えられる）の位置は文頭に固定されている（Fehn 2014）。同様に、ナマ語は、語順が比較的自由であるが、焦点の位置は文頭に固定されている（Haacke 2006）<sup>5</sup>。これらに対してグイ語では、項マーカ-を焦点として用いることは現時点では確認されていないし、固定された焦点の位置も存在しない。

このコエ語族内で見られるグイ語の2つの特徴、すなわち、PGN 辞によって主要項の文法関係が示されることと、固定された焦点の位置がないこととは、いずれもグイ語の語順がより自由であることを可能にするものである。

### 3. グイ語の語順

グイ語における主節内の構成要素順の唯一の制限は、時制・アスペクト・ムードをあらわす小詞（それぞれが別個に存在する）が、節の主語を越えて左側に生起できないという点である（Nakagawa 2013）<sup>6</sup>。この3種の間には、ムード／時制／アスペクトという、生起順に一般的な傾向があること（Bybee et al. 1994）が知られるが、グイ語においてもそれと合致した固定された順序がある。生起位置は、主語の直後であることが多いが、主語の右側でさえあれば、この3種はお互いに連続していても分離していてもかまわない。そのため、本稿ではこの3種の位置については扱わず、もっとも典型的な位置である主語の直後に TAM として固定し、 $S_{(TAM)}$ と簡略して主語と一括して扱うことにする。

そうすると、例えば  $S_{(TAM)}$ , O, V という3つの構成要素の配列順は論理的には6つであり、それらすべてグイ語では許される。以下例(3)で示す<sup>7</sup>。

<sup>5</sup> 文頭に固定された焦点スロットに、必ずなにか語彙的要素が存在しなければならない。ただし焦点の位置にすべての要素が出現できるわけではなく、動詞や項である名詞句および副詞句は出現可能であるが、TAM などの文法要素は出現できない。

<sup>6</sup> ただし接続詞によって2つ以上の文が連結された場合、接続された後続の文においては、主語の位置が当該の接続詞の左側に固定されるという制限がある。

<sup>7</sup> それぞれの語順の生起頻度については未調査であるが、概ね SOV・OSV が多く、動詞は文末に生起することが多い。

- (3) *cìrè cʰũ ʎóē=sà ʎâĩ.*  
1. 単.主格 昨日過去 鍋=女.単.目的格 買う  
「私は昨日鍋を買った」

- a.  $S_{(TAM)} O V$  *cìrè cʰũ ʎóē=sà ʎâĩ*  
b.  $S_{(TAM)} V O$  *cìrè cʰũ ʎâĩ ʎóē=sà*  
c.  $O S_{(TAM)} V$  *ʎóē=sà cìrè cʰũ ʎâĩ*  
d.  $O V S_{(TAM)}$  *ʎóē=sà ʎâĩ cìrè cʰũ*  
e.  $V S_{(TAM)} O$  *ʎâĩ cìrè cʰũ ʎóē=sà*  
f.  $V O S_{(TAM)}$  *ʎâĩ ʎóē=sà cìrè cʰũ*

この6つの語順が可能であるのは、Wh 疑問文においても同様である。以下例文(4)・(5)はそれぞれ主語あるいは目的語に Wh 疑問詞が用いられている文である。

- (4) *máà=bì cʰũ ʎóē=sà ʎâĩ.*  
誰=男.単.主格 昨日過去 鍋=女.単.目的格 買う  
「誰が昨日鍋を買った？」

- (5) *tsi cʰũ ʎí-xó=sà ʎâĩ.*  
2. 男.単.主格 昨日過去 何=女.単.目的格 買う  
「あなたは昨日何を買った？」

主語が Wh 疑問詞である場合も、目的語が Wh 疑問詞である場合も、6つの語順がすべて可能である。以下例(6)に合わせて示す (Wh 疑問詞が用いられている要素を下線で示す<sup>8</sup>)。

(6) Wh 疑問文の語順

A. 主語が Wh 疑問詞の場合

- a.  $\underline{S}_{(TAM)} O V$   
b.  $\underline{S}_{(TAM)} V O$   
c.  $O \underline{S}_{(TAM)} V$   
d.  $O V \underline{S}_{(TAM)}$   
e.  $V \underline{S}_{(TAM)} O$   
f.  $V O \underline{S}_{(TAM)}$

B. 目的語が Wh 疑問詞の場合

- a.  $S_{(TAM)} \underline{O} V$   
b.  $S_{(TAM)} V \underline{O}$   
c.  $\underline{O} S_{(TAM)} V$   
d.  $\underline{O} V S_{(TAM)}$   
e.  $V S_{(TAM)} \underline{O}$   
f.  $V \underline{O} S_{(TAM)}$

<sup>8</sup> ただしそれぞれの例の頻度の違いやどのような文脈でどの語順が多く用いられるかなどについては未調査である。

このように、グイ語においては、Wh 疑問詞の生起位置は、節内のどこであってもかまわない。Wh 疑問詞は本来的に焦点化された要素だという点から考えると、この事実は、グイ語において語順は焦点とは関係がない；焦点には決まった位置がない、ということを示していると考えられる。

ところが、Wh 疑問文に対する解答における語順は、Wh 疑問文における語順のように自由ではない。Wh 疑問文に対する解答を、Wh 疑問詞が主語の場合と目的語の場合のそれぞれにおいて、6つの語順が適格と判断されたか否かを以下に示す（不適格な例を#で示す）。Wh 疑問文に対する解答としては、疑問詞で問われた部分のみでも適格と判断されるので、その例もあげておく(7A-g・7B-g)。Wh 疑問詞の解答になっている部分（A では主語、B では目的語）を下線で示す。

(7) Wh 疑問文に対する解答における語順

A. Wh 疑問詞が主語の場合

- a. S<sub>(TAM)</sub> O V
- b. S<sub>(TAM)</sub> V O
- c. O S<sub>(TAM)</sub> V
- d. #O V S<sub>(TAM)</sub>
- e. #V S<sub>(TAM)</sub> O
- f. #V O S<sub>(TAM)</sub>
- g. S

B. Wh 疑問詞が目的語の場合

- a. S<sub>(TAM)</sub> Q V
- b. #S<sub>(TAM)</sub> V Q
- c. Q V S<sub>(TAM)</sub>
- d. Q V S<sub>(TAM)</sub>
- e. #V S<sub>(TAM)</sub> Q
- f. #V Q S<sub>(TAM)</sub>
- g. Q

これらの例から言えることは、

- A. 主語が Wh 疑問詞で問われている場合、その解答部分（主語）より述語動詞が左側に位置するのは不可
- B. 目的語が Wh 疑問詞で問われている場合、その解答部分（目的語）より述語動詞が左側に位置するのは不可

ということである。つまり、両者を統合すると、Wh 疑問の解答となる、文中の information focus を担った要素を越えて、述語動詞が左側に位置することはできないということになる。

これらの、Wh 疑問文の解答としては不適格であると判断される文は、前節でみたように、文法的には適格である。とすると、これらの文は、どのような質問に対する解答としてなら適格なのだろうか。グイ語話者によると、「あなたは昨日何をしたか」あるいは「何があったのか」という問いへの解答であれば適格だということである。

「あなたは何をしたか」という問いに対しては動詞句全体が、「何があったのか」と

いう問いに対しては文全体が **information focus** を担う。これらのケースでは、述語動詞も焦点の範囲内にある。つまり、グイ語のこの制限は、述語動詞が **background** の一部である場合は、焦点化されている項を越えて左に生起することができない、ということである。

文頭について考えると、主語や目的語は、その位置にあっても、焦点がある場合もない場合もあるが、動詞が文頭にある場合は、必ず焦点化されていることになる。もしこの解釈が正しければ、このような制限の存在は、グイ語において語順が情報構造に影響を受けることを示している。一方で、主語と目的語に関しては、焦点化してなくても、文頭に立つことができる。

次に、これらの語順のうち、どの語順であれば項マーカ (*?a*) が使用可能かを、(3) の例を用いて確認してみよう。グイ語では、項マーカが「項」をマークするのは目的語に限られている。項マーカがオプショナルに使用できるのは、以下(8)で示すように、目的語より左に動詞が先行している場合である。

(8) 項マーカ (*?a*) が使用できるケース

- a. \*S<sub>(TAM)</sub> O *?a* V
- b. S<sub>(TAM)</sub> V O *?a*
- c. \*O *?a* S<sub>(TAM)</sub> V
- d. \*O *?a* V S<sub>(TAM)</sub>
- e. V S<sub>(TAM)</sub> O *?a*
- f. V O *?a* S<sub>(TAM)</sub>

グイ語において、このような状況で項マーカが用いられるのは、先に述べたツィハ語やクエ語のように、先行する目的語を焦点化している可能性がまず考えられる。しかし、例(7)で考察した結果 (= 焦点化されていない述語動詞は焦点化された要素より左の位置に生起できない) からすれば、(8b)・(8e)・(8f)において、焦点化されているのは述語動詞であり、項マーカが後続する目的語ではないという可能性もある。あるいはさらに、項マーカがなければ述語動詞が焦点化されるような語順において、それをキャンセルし、目的語を焦点化する機能をもつのかもしれない。

この節では、グイ語において、述語動詞が焦点化された主要項より左側に生起できないことと、述語動詞が目的語より左側に位置する際にオプショナルに目的語が項マーカでマークされることを見て来た。いずれも情報構造に関わる現象であると考えられるが、その用いられるメカニズムは充分に明らかにはなっていない。

#### 4. 今後の展望

2節で見たように、グイ語は他のコエ語より自由な語順を可能とする文法的・語用論的条件を有している。その一方で、これまで報告されてこなかった語順における制限が、情報構造との関わりから、述語動詞の位置をめぐる存在している可能性があることが明らかになった。また、情報構造に関わる項マーカの出現も、他のコエ語とは異なって、述語動詞の位置がトリガーになっているようである。これら語順と項マーカが、どのように連動してグイ語の情報構造を組み立てているのかを、次の段階では自然談話資料を用いて分析を進める予定である。

なお、コエ語に属する言語はいずれも声調言語である。声調言語における情報構造とプロソディックな特徴の関連は、調査されていなかったり、あるいは関係がないとみなされていることがしばしばあるが、コエ語族においてもこの問題はこれまであまり関心をもたれてこなかった。しかしマクロコイサン<sup>1</sup>の1つとして扱われるサンダウェ語(Sandawe; アフリカ南部ではなくタンザニアで話される吸着音使用言語)の場合、PGN 辞と声調変化との両方で焦点を示すことが明らかにされている(Eaton 2003)。グイ語においては、声調自体の変化は確認できないが、長さの変動はしばしば起こる。このような、プロソディックな現象と情報構造との関わりを観察するのも今後の課題としたい。

#### 謝辞

本稿は、2017年3月に第6回国際コイサン言語学シンポジウムで行った研究発表“Focus marking and focus constructions in G!ui”で扱った内容のうち、語順に関わる部分の一部を加筆・修正したものである。データ収集の為に現地調査の実施および上記シンポジウムの参加については、科研費(課題番号 25300029)の助成をうけた。

本稿で扱ったグイ語資料はすべて著者による作例であり、グイ語母語話者である言語コンサルタントのK.D.氏にそのすべての、N.N.氏にその一部の適格性・不適格性を判断していただいた。記して感謝申し上げる。

#### 参考文献

- Bybee, Joan L., Revere Perkins & William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Eaton, Helen (2003) Focus as a key to the grammar of Sandawe. Paper presented at the 7<sup>th</sup> LASU conference, University of Dar es Salaam.
- Fehn, Anne-Maria (2014) *A Grammar of Ts'ixa (Kalahari Khoe)*. Ph.D. Thesis, Institute für Afrikanistik, Graduate School for the Humanities Cologne.
- Güldemann, Tom (2014) “Khoisan” Linguistic Classification Today. In Güldemann, Tom &



- Anne-Maria Fehn (eds.), *Beyond 'Khoisan': historical relations in the Kalahari Basin*: 1-41. Amsterdam: John Benjamins.
- Güldemann, Tom & Rainer Vossen (2000) Khoisan. In Heine, Bernd & Derek Nurse (eds.), *African Languages: An Introduction*: 99-122. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haacke, Wilfrid H.G. (2006) Syntactic Focus Marking in Khoekhoe (Nama/ Damara). *ZAS Papers in Linguistics* 46: 105-127.
- Hagman, Roy S. (1977) *Nama Hottentot Grammar*. Bloomington: Indiana University Press.
- Kilian-Hatz, Christa (2008) *A Grammar of Modern Khwe (Central Khoisan)*. Research in Khoisan Studies, 23. Cologne: Rüdiger Köppe.
- Kilian-Hatz, Christa (2013) Syntax: Kxoe subgroup: Khwe. In Vossen, Rainer (ed.), *The Khoesan Languages*: 356-379. New York: Routledge.
- Nakagawa, Hiroshi (2013) Syntax: !Gana subgroup: |Gui. In Vossen, Rainer (ed.), *The Khoesan Languages*: 394-401. New York: Routledge.
- Vossen, Rainer (ed.) (2013) *The Khoesan Languages*. New York: Routledge.

